

貨幣品質學說の論據とその批評

大野純一

## 目次

- 一、客觀的貨幣品質學說の論據
- 二、客觀的貨幣品質學說批評
- 三、主觀的貨幣品質學說の論據
- 四、主觀的貨幣品質學說批評
- 五、結 論

貨幣品質學說なる名稱は一般に吾國の學界には紹介されて居ない様であるが、(1) 此名稱は Karl Kirmayer がその著<sup>(2)</sup>に於て貨幣數量說に對立する一群の貨幣價值學說を *die Qualitätstheorie* と名けたるに基くのである。

貨幣の購買力即ち所謂貨幣の客觀的交換價值を説明せんとする學說は、精確に言ふならば、無數に存し又存在したのであるが、その根本的立場よりすれば二大別することが出来る。其一は、一般經濟價值論の應用によつて、その目的を達せんとするものであり、其二は、貨幣價值に固有なる法則を建設せんとするものである。茲に前者を貨幣品質學說、後者を貨幣數量學說と名ける、何となれば前者は貨幣に購買力(即ち客觀的交換價值)以外に內的若しくは主觀的價值を認めんとし、後者は只一つの貨幣價值即ち客觀的交換價值のみを認めその大さの決定要素を只數量的關係に於てのみ求めんとするからである。

今茲に問題とするは貨幣品質學說である。上述の如く、貨幣品質學說は一般經濟價值論の應用によつて貨幣の購買力を説かんとするのであるが、その應用せんとする一般經濟價值學說が客觀的價值學說なりや、主觀的價值學說なりやによつて、客觀的貨幣品質學說と主觀的貨幣品質學說とに分れる。以下順次にその論據を尋ね、そは果して支持し得るやを檢しよう。

(1) 橋爪明男氏はその著「貨幣理論」(一三二頁)の中に品質説なる言葉を用ひて居られるが、その内容は此處に言ふのとは大分異つて居る。氏によれば「品質説と云ふのは、世人が貨幣の流通に對して抱く信認の變化、換言すれば貨幣の品質に對する判斷が、貨幣價值に極めて重大な影響を及す、と主張する學說のことである。」

(2) *Die Quantitätstheorie*, 1922. S. 82.

## 一、客觀的貨幣品質學說の論據

先づ此種の論者が應用せんとする客觀的經濟價值論を聞き、次にそは如何にして貨幣價值に適用せらるゝやを見よう。

彼等是一般に價值を二通りに分つ、その一は使用價值 (Value in use, Gebrauchswert) であり、その二は交換價值 (Value in exchange, Tauschwert) である。前者は一對象の利用性であり、後者は一對象が他の對象を獲得し得る能力である。例へば Adam Smith は言ふ、『價值なる言葉は……異なる二つの意義を有する、時には或特殊の客體の効用を又時には他の財を購買する力……を表はす。一方を「使用價值」と呼ぶならば、他方を「交換價值」と名けることが出来る。』と。

然るに一客體の利用性は、彼等の考へに従へば、經濟財若しくは商品に對する前提ではあるが、それ等に固有な性質ではない。之に反し交換價值は經濟財或は商品に固有なるものなるが故に、經濟學上の價值は、使用價值ではなくして交換價值 (Ricardo, Mill に於けるが如く)、若しくは交換價值を現象形態として有するところの實體 (Marx に於けるが如く) である。されば Ricardo は曰く、「事物の利用性は疑もなく價值の原因である、が併し乍ら利用性の度合は價值の尺度たることは出來ぬ、」と。又 Mill は曰く、「價值なる言葉は、特に記せざる限り、國民經濟上は常に交換價值を意味する、」と。更に Marx に於て次の立言を見出すのである。「使用

價值であるといふことは商品にとつて必要な前提の様であるが、商品であるといふことは、使用價值にとつてはどうでもよい規定である。かくの如く經濟的形態規定に對して無關係な使用價值、すなはち使用價值としての使用價值は、政治經濟學の觀察範圍の外に横たはる。<sup>〔4〕</sup>「故に商品の交換關係即ち交換價值に現はれるところの共通のものが價值である、<sup>〔5〕</sup>と。

故に彼等は經濟價值の本質は交換價值の分析によつてのみ明かならしむることが出來ると信ずるのである。

然らば、使用價值を有する對象は如何なる條件の下に交換價值、若しくはその背後に潜む絶對的なる價值を有するに至るや。彼等の意見によれば、事物は、使用價值を有すると云ふ前提の下に、更にその生産に結局に於いて勞働を要すると云ふことが、經濟價值發生の根本條件をなすのである。而して經濟價值の大きさを決定し、變動せしむるところの要素は、生産に必要な人間の勞働に他ならぬのである。故に Ricardo は曰く「商品は利便性を有すると言ふ前提の許に於て、二つの源泉から其交換價值を導き出す、即ち稀少性とその獲得に要したる勞働量がそれである。<sup>〔6〕</sup>一般に財は二種に分れる、一はその量が絶對に稀少なるものであり、他はその量が任意に増加し得るものである。前者の「價值は本來此種の財に要した勞働量とは關係なく此を所有せんとする人の富並に慾望の變化に従つて變動する、<sup>〔7〕</sup>のであるが、後者の財の「交換價值、即ち一財か他の財との交換に於て幾何が與へられるやを規定するものは、殆んど専らその各々に投ぜられたる勞働の相對量である。<sup>〔8〕</sup>然

るに稀少性のみによつて價值の決定せらるゝ財は、市場に於て交換せらるゝ全財の中の極めて少部分なるが故に此種の財は經濟學上重要ではない。されば一般に事物の交換價值の大きさはその生産に要したる労働量によつて決せられると云ふことが出来るのである、と。又同様に Marx も曰く『使用價值、即ち財が價值を有するのは、抽象的意義に於ける人間労働がその中に對象化され、實體化されて居るが故である。然らば如何にしてその價值の大きさは測定せられるや。そは其財の中に含まれる「價值形成實體」たる労働の量によつてである。』<sup>(9)</sup>「故に價值の大きさを決定するものは、社會的に必要な労働の量、即ちその生産の爲めに社會的に必要な労働時間に他ならぬのである」<sup>(10)</sup>と。

斯くの如く經濟價值の大きさを決定し、その變動原因をなすものが、生産に要する労働量なりとすれば、更に此労働量は如何なる性質を有するやが次に生ずる問題である。此點に關し Ricardo は最も有利なる條件の下に投ぜられたる少き労働量ではなくして、最も不利なる條件の下に生産に投ぜられたる多くの労働量なりとし、<sup>(11)</sup> Marx は或商品を生産するに要したる個人の遇然的労働量ではなくして、「社會的に必要な労働量、即ち或使用價值の創造に社會的に必要な労働時間」<sup>(12)</sup>なりと主張するのである。

此を要するに、客觀的價值學説は經濟價值發生の條件を利用性と費用性に求めるのであるが、その大きさの決定要素は之をその生産の爲めの費用殊に労働に於て見出さんとするのである。今茲に叙述せる學説を労働價值説と名けるならば、客觀的價值學説には尙他の一派が存する。之即ち生産費學説である。併し乍ら生産費學説

は一財の價格或は價值を説明するにその生産に投ぜられたる財の價格又は價值を以てせんとするのであつて、それは問題の正しき解決ではなくして單に問題を推移せしむるに過ぎないのである。<sup>(13)</sup> 故に此處には客觀的價值學說として論理的に最も徹底せる勞働價值説のみを討究の對象に撰んだのである。

扨て以上によつて客觀的經濟價值論一般は明かとなつた。然らば論者はかゝる立場より如何にして貨幣の購買力を説明するや。

彼等は貨幣の購買力、即ち一般財に對する貨幣の交換價值は、商品自身の價值と貨幣自身の價值との交換割合である、従つて貨幣の購買力は、商品自身の價值の變動と貨幣自身の價值の變動とによつて左右せられる、と考へるのである。この事は Ricardo が「財の生産に必要な勞働量の變化……によつて生じた物價の變動と貨幣そのものの價值の變化によつて生ずる物價の變動とから生ずる異なる結果を注意するは重要なことである、」<sup>(14)</sup>と述べ、Marx が「貨幣價值に變化がないとすれば、商品の價格は、商品價值が昂騰する時にのみ、一般的に昂騰し、また商品價值に變化がないとすれば、貨幣價值が低落する時にのみ、一般的に昂騰し得る。反對も然りである。貨幣價值に變化がないとすれば商品價格は商品價值の低落する場合にのみ、一般的に低落しまた商品價值に變化がないとすれば、貨幣價值が昂騰する時にのみ一般的に低落し得る、」<sup>(15)</sup>と言ふに徴して明かである。

然らば商品價值に對立せしめられる所の貨幣自身の價值は如何なる性質を有し、如何なる原因によつて變動するや。此問題に對して彼等は硬貨と紙貨とを分ち各々異なる原理によつて解答せんとするのである。即ち前者に對しては一般經濟價值論を應用し、後者に對してはその本來の立場を捨て、數量說に走るのである。

先づ硬貨の價值に就て論者の考ふところは次の如くである。

「吾人は何等人爲的調節なき自由なる状態を想像する。かゝる状態の下に於て、鑄造の爲めの手數料なき時は貨幣の價值はそれが構成せらるゝところの地金の價值に従ふのである。」<sup>(16)</sup>而して硬貨の價值の調節者たる金屬の價值は、その生産に要する勞働によつて決定せられる、と。

やれば Ricardo は「金銀は、他の商品同様、その生産並に市場に持ち來るが爲めに必要な勞働量のみに応じて評價せられる。金が銀よりも約十五倍高いのは、金に對する需要が大なるが故でも、又銀の供給が金に比し十五倍多きが故でもなく、只一定量の金を生産するが爲めには十五倍の勞働量が必要なるが故である、」<sup>(17)</sup>とし、Marx は「その（貨幣の――筆者註）固有の價值はその生産に要したる勞働時間によつて決定せられる」<sup>(18)</sup>「この事自身（生産に必要な勞働時間――筆者註）は金屬の相對的、自然的稀少性並にそれ等を純粹なる金屬状態で獲得することの難易に依存するであらう、」<sup>(19)</sup>と述べるのである。

次に紙幣の價值は如何にして説明せられるであらうか。此點に關して Ricardo は曰く「紙幣は何等實價を有せざるものではあるが、其數量が制限せらるゝことによつて、その交換上の價值は等しき稱呼の鑄貨又は鑄貨



の中に含まれる地金に等しくなるのである。<sup>〔24〕</sup>「紙幣の流通が鑄貨の流通に對して有する長所の一として……吾々は……其數量を容易に變化し得ること、それによつて貨幣の價值を安定せしめると云ふ好ましい目的を……達し得ることを擧げることが出来る、<sup>〔25〕</sup>と。又 Marx の考へは次の如くである。「紙幣の如く相對的に無價值なる事物は單に金貨幣の象徴として作用するに過ぎぬ。<sup>〔26〕</sup>併し乍ら「一定の金の量が對象化されたる勞働時間として一定の價值の大きさを有する限り、金章標も亦價值を表示する。而してそれによつて表示さるゝ價值の大きさは常にそれが表示する金の量によつて決定せられる。<sup>〔27〕</sup>即ち紙幣全體としての價值はそれが代る可き金の量の價值によつて決定せられる。併し乍ら個々の紙幣の價值はその數量に従つて定まるのである。「紙幣は金貨幣を代表する限りに於てのみ價值章標なるが故に、紙幣の價值は單にその分量によつて規定されるのである。<sup>〔28〕</sup>「されば任意の紙幣の量が流通過程に吸収せられ、同様に消化せられる。何となれば、價值記號は如何なる金名義を以つて流通過程に入り來るも、流通過程の内部に於ては、その代りに流通するであらうところの金分量の章標にまで壓縮せられるからである。<sup>〔29〕</sup>と。

要するに客觀的貨幣品質學説は、貨幣の購買力或は交換價值を以て、貨幣自身の價值即ち貨幣の內的價值と財の價值との交換割合なりとし、更に貨幣の內的價值を説明するに客觀的經濟價值論を應用し、そは貨幣單の位素材の費用（勞働）によつて決定せられると主張するのである。但し紙幣に關しては勞働價值説を適用せずして、稀少財の價值の説明原理に基いて數量説を採るのである。

- (1) Adam Smith : An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. p. 21.
- (2) Karl Diehl : Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung. III. Auflage. I. Teil. S. 2.
- (3) John Stuart Mill : Principles of political economy. 1921. p. 437.
- (4) Karl Marx : Zur Kritik der politischen Ökonomie. Herausg. von Karl Kautsky. I. Bd. 1924. S. 2.
- (5) Karl Marx : Das Kapital. Herausg. von Friedrich Engels. 1922. S. 5.
- (6) The works of David Ricardo, ed. by J. R. McCulloch. 1871. p. 9.
- (7) Ibid. p. 10.
- (8) Ibid. p. 10.
- (9) Das Kapital. S. 5.
- (10) Das Kapital. S. 6.
- (11) Ibid. p. 37.
- (12) Das Kapital. S. 6.
- (13) Karl Diehl : Theoretische Nationalökonomie. III. Bd. 1927. S. 40.
- (14) Ibid. pp. 30—31.
- (15) Das Kapitel. S. 63—64.
- (16) J. S. Mill : Ibid. p. 500.
- (17) Ibid. p. 213.

- (18) Das Kapital. S. 57.  
 (19) Zur Kritik. S. 160.  
 (20) Ibid. pp. 213—214.  
 (21) Ibid. p. 397.  
 (22) Zur Kritik. S. 107.  
 (23) Zur Kritik. S. 109.  
 (24) Zur Kritik. S. 114.  
 (25) Zur Kritik. S. 117.

然るに Marx は硬貨の價值を數量説によつて説かんとする企圖には極力反對するのである。

彼によれば「流通手段の貨幣片の流通度數」= 流通手段の貨幣片の作用する貨幣の量 (Das Kapital. S. 84.) なる方程式は成立し此法則は一般的に妥當する。數量説はこの式を因果的に解するに際し右側を原因とするのであるが、斯くの如く「商品價格は流通手段の量により又後者は一國に存在する貨幣素材の量によつて決定せられると云ふ幻想は、その本來の主張に就て見れば、商品は價格なくして、貨幣は價值なくして流通過程に入り來り、その中で商品價格の可除的一部が金屬の堆積の可除的一部と交換されると云ふ馬鹿々々しき假説に根底を有するのである。」(Das Kapital. S. 87—88)

寧ろ此處には反對の因果關係が存在するのである。「より大なる又は少なる貨幣が流通するが故に價格が或は高く或は低くなるのではなく、價格が或は高く或は低きが故により多く、もしくは少くの貨幣が流通するのである。而してこの事は最も重要な經濟法則の一つである。」(Zur Kritik. S. 97.)

斯くて Marx は數量説とは反對の因果關係をこゝに認めるのである。従つて此點に於て彼は Currency school ではない。

くして Banking school に屬するのである。

更に彼は流通貨幣の量に關しては次の如き法則を建てるのである。

今假りに支拂手段たる貨幣の職能を除外して考へるならば「此總額それ自身（流通の爲めに必要な金の量：筆者註）は、一、價格の程度即ち金を以て評價されたる諸商品の交換價值の相對的大小、二、一定の價格で流通する諸商品の分量、即ち與へられたる價格による賣買の分量」並に三、「貨幣が流通する速度即ち一定期間内に實際取引を營む速度」によつて決定せられる。換言すれば「諸商品の交換價值とそれらの變態の平均速度とが與へられて居るならば流通する金の分量はそれ自身の價值に依存する。」（Zur Kritik. S. 94—98）と。

此法則は Marx によれば支拂手段としての貨幣を考慮に入れる時は次の如き修正を蒙らねばならないのである。

即ち「與へられたる期間内に流通する貨幣總額を考へて見るに、それは、——流通手段及支拂手段の速度が一定して居るとするならば——實現さる可き商品價格の總和に、万期となる可き各支拂の總和を加へた金額の中から、相殺される諸支拂と更に同一の貨幣片が或時は流通手段として或時は支拂手段として交々通用する度數とを減じたものに等しいのである」と。（Das Kapital. S. 102）

## 二、客觀的貨幣品質說批評

此種の貨幣價值學説は古來正統學派經濟學者によつて支持せられて來たのであるが、最近に於ては次第にその影を潜めるに到つたのである。併し乍ら現代に於ても尙 Marx の勞働價值學説の信奉者、例へば Kautsky, Hilferding<sup>(1)</sup> 等によつて貨幣の購買力説明の原理とせらるゝのであつて、未だ死したる學説とは稱することが出

來ないのである。されば茲に批評を試みよう。

併し乍ら、一般經濟價値の説明原理として客觀的價値學說が成立し得るや否やは、本稿の範圍外に屬するが故に、此處には假りに客觀價値學說はそれ自身としては成立し得るものと看做し、これを貨幣の購買力に應用するにあたり如何なる特殊の障礙、矛盾が存するやを檢することにしよう。

今假りに一般經濟財の價値は客觀的價値學說によつて解明し得るとするも、貨幣の素材たる金銀の價値には之を直接適用し得ざる二つの理由が存する。一、一般財に於ては年々の生産量は其供給量の大部分を占める、何となれば過去に於て生産されたる財は原則として一定期間の後には消費し盡くされてしまふからである。従つて年々の生産に投ぜられたる費用又は勞働量の多少はその財全體としての價値に重大なる意義を有する。然るに貨幣素材たる金銀の年産額は世界に現存する金銀の量に比し極く少部分を構成するに過ぎぬ。蓋し金銀は使用によつては消盡されざるが故である。されば年々の新産額に投ぜられる費用又は勞働量の多少は全體としての金銀の價値に對しては大なる意義を有しないのである。かゝる方面より生ずる金銀價値の變動は貴金屬の生産費に革命的な大轉換が発生したる場合若しくは非常に豊富な鑛山が発見された場合に於てのみ可能であつて、常態の下に於ては寧ろその需要の變化によつて價値の變動が生ずるのである。この事は現在に於ける銀價の暴落に鑑みる時は思ひ半に過ぎるのである。二、抑々鑛山業は、凡ゆる産業部門中最も投機的性質を帯びるものであつて、多くの鑛山業は何等利益を伴ふことなくして長年の間經營せらるゝことがあるのである。され

ば Epstein は、鑛山業の四分の三は賭仕事であり、そのロンドン取引所は鑛山價值に關しては大なるモンテカルロであるとの言をなし、鑛山監督官 Nickel はトランスバール及其附近の六十八の株式會社組織金山の中、二十八會社のみが配當をなし、残りの四十會社は一八八八年事業開始以來一八九四年迄の間一文の配當をも支拂はぬと斷言したのである。<sup>(2)</sup> かゝる場合に於ては、その年々の生産品は生産費或は投ぜられたる勞働以下の價值で賣却せられるのである。従つてこれを以てその價值を説くこと出來ざるは言を俟たないのである。故に客觀的價值學説は他の經濟財の價值には適用し得るとするも、貨幣素材即ち金銀には適用せしめ得ないのである。<sup>(3)</sup>

茲に一步を讓つて貨幣素材の價值はその生産に要したる費用若しくは勞働量によつて決せられるとするも、尙これを以て貨幣價值を説明し得たりとはなすことが出來ぬ。何となれば貨幣素材の價值と貨幣價值とは決して同一物ではなく又一方的に前者によつて後者が導き出されるものでもないからである。殆んど素材價值なき紙幣が價值を有し、補助貨が實質價值以上の價值を以て流通するは貨幣價值と素材價值とは異なることを證し、銀本位の廢止によつて銀價の暴落せる事實は貨幣の價值は一方的に貨幣素材の價值に依存するものではなく、むしろ今日に於ては貨幣素材の價值は貨幣としての用途即ち貨幣法によつて與へられ支持せられると云ふことを示すのである。されば山崎博士も曰く「金地金一匁ノ價格ガ常ニ五圓ニ接近スル所以ノモノハ他ニ非ズ、銀行券ノ兌換ヲ日本銀行ニ請求スルトキハ何時ニテモ五圓ニ對シ一匁ノ金ヲ包含スル五圓金貨ヲ引出シ得ルト同

時ニ自由鑄造ニ依リ一匁ノ金地金ハ何時ニテモ五圓金貨ニ製造スルコトヲ得レバナリ。是ヲ以テ兌換停止セラレタル場合ニハ金地金ノ價格ハ一匁五圓ヲ超ユルコトアルベク、之ニ反シテ自由鑄造廢止セラレタル場合ニハ五圓以下ニ低落スルコト無キヲ保セズ、第十九世紀ニ於ケル銀價ノ趨勢ニ鑑ミバ思半バニ過グルモノアラン。即チ一八七〇年代ノ初ニ至ル迄ハ銀モ數多ノ邦國ニ於テ本位貨幣ノ原料タルノ榮譽ヲ有シテ自由鑄造ノ特典ヲ失ハザリシヲ以テ、金本位タル英國ニ於テモ其價格ハ變動少ナク、金ニ對スル比價ハ常ニ金一銀十五半ノ割合ニ接近シタリシモ、諸國續々金本位制ニ移リ、佛國、印度等亦自由鑄造ヲ廢止セルヲ以テ、其價格ハ非常ニ低落スルニ至レリ。而シテ爾來銀地金ハ他ノ金屬ト同ジク、一種ノ商品トシテ價格決定セラル、ニ拘ラズ、佛國ノ五「フラン」銀貨、印度ノ「ルーピー」銀貨ノ如キハ、其包含スル銀ノ地金トシテノ價值ヨリモ遙ニ大ナル價值ヲ有スルモノニシテ、此現象ハ諸國ノ補助銀貨ニ就テモ之ヲ認ムルコトヲ得ルモノトス。此一事ヲ以テスルモ、貨幣ノ價值ト之ヲ構成スル地金ノ價值トハ同一物ニ非ザルヲ知ルベキナリ。曩ニ述ベタルガ如ク、金本位國ニ於テ同量ノ金地金ト金貨トガ價值ヲ同ジフスルヲ見テ、貨幣ノ價值ガ地金ノ價值ニ追隨スルモノト爲スハ、原因結果ノ關係ヲ顛倒スルモノト謂フベキナリ。』と。されば Ricardo Marx Kautsky は素材價值なき貨幣の購買力に對しては其本來の立場を捨て數量說に降り Hilferding は職能價值說に據らねばならなかつたのである。之明かに客觀的價值學說の貨幣價值問題に對する無能力を暴露するものである。

更に以上の諸點を全部看過するとするも尙客觀的貨幣品質學說はその根本に於て大なる缺陷を有する。一彼等

は、貨幣の購買力即ち物價は商品の内的價值と貨幣の内的價值とが比較、對立せしめられることによつて生ずる、換言すれば商品の内的價值を與へられたるものとし、同じく與へられたる貨幣の内的價值に照合せしめて初めて物價は成立する、と考へる。故に此種の論者は貨幣並に商品に交換以前に獨立、絶對の内的價值を認め兩者が交換過程に入る場合互に比較せられて物價現象が生ずるとする、即ち貨幣の外的交換價值を説明するに内的貨幣價值と内的商品價值とを引き合ひに出すのである。

併し乍ら吾人が經濟學上認識し得る貨幣價值は唯一つ存するのみであつて、それは彼等の考ふところの外的貨幣價值である。彼等の所謂貨幣それ自身の價值、内的貨幣價值は此認識可能なる外的貨幣價值の單なる抽象の產物であつて、經濟學上それ自身認識するを得ないのである。若し貨幣の外的交換價值即ち購買力が變動するならば、吾々は分析的方法によつて、それが主として貨幣側の事情によるや、商品側の事情によるやを知ることが出来るが、かゝる場合貨幣の内的價值なるものは此を除いて考ふことが出来る、否除かねばならぬのである。何となれば貨幣價值即ち購買力を貨幣それ自身の價值と商品自身の價值とに分つと云ふことは、恰も大さの分を分子なる分數に書き改め、分子並に分母を各々獨立の大さなりと考ふと同様、誤なるが故である。貨幣價值は經濟學上唯一つ存在する、此即ち客觀的交換價值、購買力に他ならぬのである。<sup>(5)</sup> 蓋し一般商品は職能價值以外に實體價值を有すれども、貨幣は只交換過程に於て他の商品を支配するてふ職能價值のみを有し交換過程を離れて、それ以前に、如何なる價值をも有し得ぬからである。



此結論は、Ricardo に於ても若し彼がその一般經濟價值論に忠實であり、それを徹底せしめて居たならば、自から生じて來なければならなかつたのである。Marx は經濟價值を以つて、交換價值或は交換關係の背後に在る第三の絶對的のものなり、と考へたるに反し、Ricardo にあつては交換價值が直ちに經濟價值であつた。従つて彼によれば經濟價值は絶對的のものではなく相對的のものである。故に Ricardo にとつては交換過程より離れてそれ以前に存するが如き絶對的、內的價值は成立し得ない筈である。されば Ricardo は、その本來の價值論を固持する限りは、當然貨幣に於ても單に外的價值のみを認め貨幣それ自身の價值、內的價值等は除外して論を進めなければならなかつたのである。

- (1) Karl Kautsky : Sozialdemokratische Bemerkungen. 1918. S. 106—156.  
Rudolf Hilferding : Das Finanzkapital. II. Aufl. 1920. S. 1—8.
- (2) Vgl. Diehl : Theoretische Nationalökonomie. S. 278.
- (3) Vgl. Wilhelm Lexis : Allgemeine Volkswirtschaftslehre. 1910. S. 100—101.
- (4) 山崎覺次郎博士著 貨幣銀行問題一斑 第三版 五六—五七頁。  
此種の見解は既に名目學說の體系的先驅者 Samuel Oppenheim の Die Natur des Geldes. 1855. に於て見出すことが出来る。彼曰く「寧ろ反對に貴金屬素材の價值は貴金屬貨幣によつて……決定せられ、調節せられるのである。」(一二七)「確かに以前には金屬貨幣の價值決定に際し貴金屬素材は能動的方面であつた。併し乍ら現在に於ては反對に貨幣としての貴金屬の價值が能動的要素をなし、金屬素材は受動的要素たるのである」と。(一二九)
- (5) Vgl. Ernst Wagemann : Allgemeine Geldlehre. I. Bd. 1923. S. 62-65.

### 三、主觀的貨幣品質學說の論據

此處に於ても亦先づ最初に此種の論者が應用せんとする一般的主觀的經濟價值論を主として v. Böhm-Bawerk の所論に従つて窺はう。

彼は一般に價值を二種類に區分する。一は主觀的價值であり、他は客觀的價值である。「主觀的意味に於ける價值は一財或は諸財の一定量が一定の主體の福利目的……に對して有する意義」であつて、(一五九)彼は更に此價值を主觀的使用價值と主觀的交換價值とに細分する。前者は「或個人がその目的の爲めに直接使用すると云ふ前提の下に、一財がその人の福利目的に對して有する意義」であり、(二〇四)後者は「交換に於て他の財を調達し得る能力に基いて、一財が一個人の幸福に對して有する意義」である、(二〇四)「此に反し、客觀的意味に於ける價值は一財が外的客觀的効果を齎らすと云ふ、吾人の判斷に於て認められたる適合性」であつて、(一五九)此種の價值は無數に存在するも國民經濟學上最も重要なものは、その中の客觀的交換價值である、と彼は言ふ。而して此概念の下に彼は「交換に於ける財の客觀的妥當、換言すれば交換交通に於てその對價として、他の財の一定量を調達するてふ、與へられたる實際的關係に基く財の能力」を解す可きであるとす。(一六〇)

彼等の主張するところによつて此三種の價值の關係を觀るに、客觀的交換價值は主觀的交換價值によつて、

後者は更に主觀的使用價值によつて決定せられる。従つて客觀的價值の研究は主觀的使用價值にその出發點を求めなければならぬのである。

### 主觀的使用價值。

彼等によれば凡て財は利用性並に相對的稀少性の二前提の下に初めて主觀的價值を有するのである。(一六七)然らば主觀的價值の大きさは如何にして定まるや。彼等の考へに従へば、抑々吾人の有する種々の慾望は其重要の度に従つて種々の段階を形成するのみならず、各段階の個々の具體的慾望に於ても其重要さは階梯をなして居るのである。何となれば同様の享樂行爲は繰返さるゝ時は或點よりは快樂が減少し遂に不快嫌憎に變化する傾向を有するからである。故に主觀的使用價值の大きさは、かゝる慾望の圖式の中何れの慾望がその財によつて充足せらるゝやの問題によつて決せられる。而して更に此問題の解答は、若し吾人が評價さる可き財を有しなければ、何れの慾望が斷念せらるゝやによつて與へられる。言ふ迄もなく、かゝる際に斷念せらるゝ慾望は評價さる可き財をも含んで此種の財の全量によつて充足さる可き慾望中重要さの最も少きものである。換言すれば一財の價值の大きさはその限界利用の大きさによつて決定せられるのである。(二四七以下)而して一財の限界利用そのものの高さを規定するものは慾求 (Bedarf) と充當 (Deckung) との關係である。「より重要な慾望が充足を要求し、他面より少き財の量がその爲めに處分し得る時は、より高き位置にある慾望が充足を斷念しなければならぬ。従つて限界利用は高いのである。之に反し、より重要さの少き慾望が充足せられ、その爲めに

存在する財の量がより多き時は、充足は益々下方に向つて進み限界利用並に價值は下落するのである。」(一九四)

扱以上は一單位の財の主觀的使用價值の大きさの問題であるが、多數の單位の財の價值の大きさに關しては限界利用論者の間にも二つの異なる説がある。v. Böhm-Bawerk はその價值は個々の單位の次第に減ずる限界利用を合計したものであるとなすに對し、v. Wieser は最後の財の單位の限界利用にその單位數を掛けたものであると主張するのである。(2)

#### 主觀的交換價值。

此價值に就いて彼等は言ふ。技術的には只一つの用途を有する財も、交換經濟の下に於ては他の財との交換に用ひられると云ふ今一つの用途を有する。かゝる場合、財に主觀的使用價值以外に主觀的交換價值が認められる。此主觀的交換價值の大きさは、交換によつて獲得し得る財の限界利用によつて決定せられる。通常一個人に對して、主觀的使用價值と主觀的交換價值とは等しき高さを有するものではない。かゝる場合、此財の經濟價值を規定する限界利用は兩者の中の高き方の限界利用であると。(二〇一—二〇六)

#### 客觀的交換價值。

客觀的交換價值は、論者の觀るところによれば、交換によつて他の財を獲得し得る一財の能力である。然るに價格は斯くて獲得せらるゝ財の量それ自身なるが故に、客觀的交換價值と價格とは同一ではないが、兩者の

法則は一致するのである。されば價格の法則を述べることによつて自から客觀的交換價值の法則は明かとなるのである。(一六二)

v. Böhm-Bawerk にすれば、抑々交換は、一、交換によつて利益を得ること、二、少なる利益よりも大なる利益を追求すること、三、全然利益を得ざるよりも、寧ろ少なる利益を以て満足すること、の三の場合の何れかを條件として成立するのである。従つて交換が可能なるが爲めには、當事者の商品並に價格財に對する評價が異なる、否正反對なることを要するのである。(二六七)而して與ふる財に比し受くる財を高く評價する者程多くの交換能力を有するのである。故に交換關係は次の如き法則によつて規定せられるのである。

一、孤立せる交換に於ける價格構成——購買者の主觀的評價を最高限とし、販賣者の評價を最低限として、その間に於て定まる。(三六九—二七〇)

二、購買者側にのみ競争ある場合に於ける價格構成——交換能力最も大なる競争者の評價を最高限とし、除外されたる競争者中交換能力最も大なる者の評價を最低限として、その間に於て價格は決定せられる。(二七〇—二七一)

三、販賣者側にのみ競争ある場合に於ける價格構成——價格は交換能力最も大なる販賣者の評價を最低限とし、除外されたる販賣者中最も交換能力ある者の評價を最高限として、其間に於て決せられる。(二七一—二七二)

四、兩側に競争ある場合に於ける價格構成——當事者が同時に競争し賣買すると見るときは、凡ての交換は等しき價格で行はれ、その價格の高さは兩限界對偶者 (Grenzpaar) の主觀的評價の高さによつて限定せられ、決定せられるのである。(二七二—二七九)

以上は v. Böhm-Bawerk を通して見たる主觀的經濟價值論の概要であるが、要するに此種の論者は客觀的交換價值は結局に於て當事者の主觀的評價即ち限界利用を基礎として說かれねばならぬと考へるのである。

次に然らば主觀的貨幣品質學説は如何にして此一般價值論を貨幣價值の説明に應用せんとするか。

貨幣に於ても亦彼等は主觀的貨幣價值と客觀的貨幣價值の二を分ち、前者より後者を導かんとする。

主觀的貨幣價值。

彼等によれば、貨幣はその所有者に於ける直接使用の爲めに評價せられるのではなくして、交換によつて他の財を獲得し得るが爲めに評價せられるのである。従つて貨幣の主觀的價值は主觀的使用價值ではなくして主觀的交換價值である。例ば v. Wieser は言ふ「貨幣が個人經濟内に於て有する人的價值 Der persönliche Wert (他の論者の所謂主觀的價值——筆者註) は常に交換價值であつて、決して使用價值ではない。一貨幣片が所有者に對して使用價值を有するのは、彼が此貨幣片から貨幣性を奪ひ、一金屬片として使用する場合のみである。換言すれば貨幣の貨幣としての人的價值を基礎付ける用途と、その金屬的素材價值を基礎付ける用途とは

全く異なるものであつて、各々の價值は他から獨立に意義を有するのである。貨幣價值はその全意義を交換より受納する、而してそこから本來の大きを獲得するのである——その素材が殆んど無價值なる紙幣も交換より一定の人的價值を得て來るのである……」<sup>(3)</sup>と。

されば限界利用論者が一般財の客觀的交換價值の説明に際して主觀的使用價值より論を進めんとするに對し、之を貨幣に適用するに當つて論者は主觀的交換價值をその出發點とするのである。之貨幣價值説明に際し一般主觀的經濟價值論が修正せらるゝ第一項目である。

貨幣の此主觀的交換價值の大きさは、彼等の說に従へば、貨幣の限界利用、即ち貨幣全量中最終の單位によつて得る財の單位の限界利用によつて決定せられる。<sup>(4)</sup>而して貨幣の限界利用そのものは個人が支配し得る貨幣量と慾望圖式内に於ける慾望の地位と物價狀態との三要素によつて定まる。<sup>(5)</sup>乍併茲に云ふ貨幣量は「何人かゝ偶然ポケット若しくは錢箱の中に有する貨幣量なりと解す可きではなく、經濟期間中に支配せられる收入を意味す可きである。」「又慾望は貨幣にあつては一定の個々の慾望ではなく全體の慾望狀態である」<sup>(6)</sup>

抑々一般財の限界利用は、既に前節に於て檢したるが如く、慾望狀態と財の量との二要素によつてのみ決定せられたのであるが、貨幣にあつては更に第三の要素物價狀態が附加せられたのである。彼等がその理由として述べる所は次の如くである。即ち貨幣の限界利用は直接使用より生ずる利用ではなくして、最終單位によつて得る財の限界利用なるが故に、貨幣の限界利用は導き出されたる限界利用である。然るに最終貨幣單位によ

つて得る財の量は、物價狀態如何によつて變動するが故に、貨幣にあつては上述二要素以外に物價狀態を第三の要素として持つのである、と。<sup>(9)</sup> 此即ち一般限界利用學說の第二の修正點である。

以上は一單位の貨幣の主觀的價值の大きさであるが、一定量の主觀的貨幣價值の大きさに關しては此處に於ても亦論者の意見は二派に分れる。例ば、Wieserは「大なる貨幣額並に貨幣の全所有量は其單位の限界價值に單位數を掛けた丈け有するのである。」<sup>(10)</sup>と主張する。吾國に於ても坂西教授はかゝる意見を有する。曰く「普通の財に就いて見れば、其全量の利用（全部利用）は最終單位の利用（限界利用）に單位數を乗じたるものと等しいのではなくして、全量を構成する箇々の單位の遞減しつゝある利用の和に等しいものと見なければならぬ。然るに一定貨幣額の全部利用は前述の如く其限界利用に單位數を乗じたるものと等しい」<sup>(11)</sup>と。之に反しBrickは「吾人の收入の全利用は收入の増加と共に當然増加する。然し乍らそは次第に減少する加算によつてである、」<sup>(12)</sup>とする。

#### 客觀的貨幣價值。

一般財の客觀的交換價值は財の限界利用より直接導き出すことが出來たのであるが、此過程は貨幣の客觀的價值の説明に當り又彼等によつて修正せられなければならないのである。何となれば論者は「（貨幣の）客觀的交換價值は、之に反し、直接限界利用の法則に従はずして只間接にのみそれによつて決定せられる、」<sup>(13)</sup>となすからである。彼等によれば、貨幣の客觀的交換價值は一般物價の逆數である、而して一般物價と個々の價格と



は同一ではない。然るに貨幣の限界利用は個々の価格を決定し變動せしめ得るも直接物價を左右することは出来ないのである。乍併一般物價は個々の価格のみより生じ、個々の價格の變化によつてのみ變動するが故に、貨幣の限界利用は個々の價格を通して間接に一般物價を變動せしめ規定するのである。換言すれば主觀的貨幣價値の評價は個々の價格を規定し、更に此個々の價格は一般物價を規定する、故に貨幣の客觀的價値は間接にその主觀的價値によつて決定せられるのである。Mises は此間の消息を次の如く述べる。即ち「多數の個人の貨幣に對する主觀的評價は、國民經濟的大量現象となり、貨幣の客觀的交換價値の變化に對し決定的影響を與へる。」例ば「國民經濟内に於ける貨幣量の増加は……多數の經濟主體の貨幣所有の増加を意味する。而して此人々の側に於て貨幣量と貨幣慾との關係の推移が生ずる。即ち彼等は貨幣量の比較的過剩と他の經濟財の比較的缺乏とを感ずるに至る。此兩事情の結果彼等に於て貨幣單位の限界利用が低落する。この事は彼等の市場に於ける態度に影響を及ぼす。而して彼等は以前より以上の交換能力者、購買能力者となるのである。今や彼等は市場に於てより強く慾望の對象の要求を表示する。即ち彼等は獲得せんとする商品に對しより多くの貨幣を提供することが出来るのである。その自明の結果該財の價格は上騰する、而して貨幣の客觀的交換價値はそれ等の商品に對して下落する。併し乍ら市場に於ける價格の騰貴は決して新な貨幣の最初の所有者が望んだ財のみに止まるものではない。此種の財を市場に提供した人々の收入並にその相對的貨幣量も亦増加し、彼等は望む財に對して以前よりも強度の需要をなすことが出来る、かくて此種の財の價格も亦騰貴する。此價格の騰

貴は互に平衡を保たんとして多少凡ての商品に及ぶまで繼續するのである、<sup>(12)</sup>茲に於て貨幣の客觀的交換價值は下る、と。

此を要するに主觀的貨幣品質學説は、一般財の客觀的價值を主觀的價值より説きたるが如く、客觀的貨幣價值も亦主觀的貨幣價值によつて説明し得ると信するのである。但し茲に彼等は主觀的經濟價值論を貨幣に應用せんとするに當つては上述の如く三ヶの修正を爲さねばならなかつたのである。

- (1) E. von Böhm-Bawerk : Kapital und Kapitalzins. 4. Aufl. I. Bd.
- (2) v. Böhm-Bawerk ; a. a. O. S. 191.

Friedrich von Wieser : Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft. 1924. S. 70.

- (3) v. Wieser : Gesammelte Abhandlungen 1929. S. 204.
- (4) Vgl. Willy Hirsch : Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie. 1928. S. 19.
- (5) v. Wieser : Abhandlungen. S. 204.
- (6) v. Wieser : Abhandlungen. S. 204—205.
- (7) v. Wieser : Abhandlungen S. 205.

Eugen von Philippovich : Grundriss der politischen Oekonomie. 1923. I. Bd. S. 305.

Hirsch, a. a. O. S. 19—21.

- (8) v. Wieser : Der natürliche Werth. 1889. S. 46.
- (9) 坂西由藏教授著 經濟生活の歴史的考察 三四四頁。

- (10) Birk : The theory of marginal value 1922. p. 60.  
(11) v. Wieser : Artikel „Geld“ im Handwörterbuch d. Statsw. S. 697.  
(12) Ludwig Mises : Theorie des Geldes und der Umlaufmittel 1924. S. 119—120.

#### 四、主觀的貨幣品質學說批評

此處に於ても亦一般價值學說としての限界利用學說の批評は之を避け、此學說を貨幣價值問題に適用するに際し如何なる特殊の障礙に遭遇するやを檢しよう。

一般に貨幣論上限界利用學說が問題となる場合は二ある。一は貨幣の所謂主觀的價值に關して限界利用の法則が適用せらるゝや否や。即ち貨幣それ自からを限界利用學說の對象として論じ得るや否やであつて、他は貨幣の客觀的交換價值の成立並に決定に際し、その説明手段として限界利用學說を引用し得るや否やである。

先づ第一の場合より檢しよう。貨幣限界利用論者は主觀的貨幣價值の大きさは貨幣全量中最終の單位によつて得る財の單位の限界利用によつて決定せられる、従つて支配し得る貨幣量の大なるに従つて主觀的貨幣價值は減少すると主張し、第一の問題を肯定せんとするのであるが、かゝる主張は、貨幣所有者によつてその貨幣とそれによつて獲得せらるゝ財との關係が常に具體的に明かに意識せられて居ると云ふ前提の下に於てのみ妥當性を持ち得るのである。然るに貨幣は經濟上無限の方向の慾望充足手段なるが故に、今或對象の賣却に際し何

人もその得たる貨幣を以て將來如何なる對象を交換するやを一々明かに意識するものではない。されば假令貨幣に主觀的價值ありとするも、そはその最終の單位によつて得る財の限界利用によつて決せられるとは言ひ得ないのである。

又假りに一定貨幣量の最終單位によつて得る財の限界利用なるものを人は賣買に際し意識し得るとするも、そは決して貨幣自身の限界利用ではなくして、飽くまでも貨幣によつて得る財そのものゝ經濟人に對する限界利用である。一定額の貨幣の所有者が購買によつて充さる可き特定の慾望の特定の階梯を意識したりとするも此場合の評價は特定の慾望の對象に向けられたのであつて、一般的交換手段としての貨幣それ自身に對するものではない。

以上の理由によつて吾人は貨幣そのものを限界利用學說の對象たらしめることを得ずと信ずるのである。此問題は既に吾が國の學界に於て論じ盡くされたるの觀あるが故に茲には只以上の立言を以つて止めよう。(1)

今茲に貨幣の所謂主觀的價值は限界利用によつて決定せらるゝと言ふ彼等の主張を假りに認めるとするも、尙此を以ては客觀的交換價值を直接たると間接たるとを問はず説くことを得ざる特殊の理由が貨幣には存在するのである。即ち貨幣論上の限界利用說第二の問題の否定的理由が存在するのである。

限界利用論者は貨幣の限界利用即ち主觀的價值より客觀的交換價值を導き出さんとするのであるが、貨幣の利用性若しくは主觀的價值は既にその客觀的交換價值を前提して初めて與へられるのである。論者は貨幣價值

の説明に際しては一般限界利用學說をそのまゝ適用することを得ず、茲に修正を加へ、一般的限界利用決定要素、慾求と充當、以外に物價狀態をその要素に附加したのである。併し乍ら物價は貨幣の客觀的交換價值の逆數なるが故に彼等は説明せんとするものを既に前提するのである。此意味に於て貨幣限界利用論者は一の Zirkel に陥るのである。この事は夙に Wicksell 並に Helfferich の指摘したところである。<sup>(2)</sup>

此有名なる貨幣限界利用の Zirkelschluss に對し一方の論者は次の如き遁辭を弄せんとする。

即ち、貨幣の客觀的交換價值の説明に當り Nickel が存するが如き觀を呈するのであるが、事實は然らずして茲では説明さる可き現象と前提されたる現象とは全く異なるものである。此説明に利用せらるゝところのものは、現に存し而も過去に於て發生したる貨幣の客觀的交換價值である。然るに説明の目的たる貨幣の客觀的交換價值は將來のものであつて、兩者は明かに別箇のものである。故に何等循環論は存しない<sup>(3)</sup>と。吾が國に於ては例ば田中金司教授は曰く「貨幣の限界利用が其の客觀的價值を前提とせずしては成立し得ざることは前者を以て後者を説明せんと欲する學者と雖も悉く之を認めて居る。而かも彼等が敢て前者を以て後者を説明せんとする所以は貨幣の限界利用の前提を爲す貨幣の客觀的價值が、貨幣の限界利用を以て説明さる可き貨幣の客觀的價值と同一にあらざるが故である。昨日の貨幣の客觀的價值は今日の貨幣の限界利用の基礎をなすが、この限界利用こそ次に成立すべき貨幣の客觀的價值の形成を説明するものである。この意味に於て貨幣の主觀的價值を以て其の客觀的價值を説明することは毫も差支へない<sup>(4)</sup>と。又 Mises も言ふ「かゝる外見上の循環

論から逃げ道を見出すのは困難ではない。成程個人の貨幣單位の評價は市場に於ける貨幣と他の經濟財との交換關係の存在を前提してのみ可能であると云ふことは正しい。併し乍らこのことから限界利用學說によつて貨幣の客觀的交換價值決定根據を充分に説明することが不可能であると結論するならば、それは誤りである。……前提されたる價值は吾人の説明せんとする價值とは同一ではない、前者は昨日の交易價值であつて、それによつて今日の交易價值が説明されるのである。今日市場に存立する貨幣の客觀的交換價值は市場主體の主觀的評價に影響せられて昨日の客觀的交換價值より構成されたのである。而して後者は又主觀的評價の作用の下に一昨日の客觀的交換價值より發生したのである。」<sup>(6)</sup>「若しも今日の貨幣價值が昨日のそれに、昨日の貨幣價值が一日のそれに歸屬せしめられるならば、最初の貨幣價值の決定根據の問題が生ずる。此問題の解答は貨幣使用の發生並に貨幣たる職能に基く特殊の貨幣價值構成要素を考察することによつて容易に與へられる。最も古き歴史的に讓渡されたる貨幣價值は明かに貨幣財の價值である……最も古き貨幣價值は貨幣素材の商品價值にまで溯るのである。」<sup>(7)</sup>「若しも歴史的に讓渡されたる客觀的交換價值の援けなしに貨幣と商品の交換關係を説明せんことを貨幣價值論に要求するものあらば、それは其本質並に任務に反する要求をなすものである。」<sup>(8)</sup>と。

果して斯る所論によつて循環論を免れ得るであらうか。大いに疑問である。吾人は貨幣の客觀的交換價值に關して次の二つの問題を判然區別しなければならぬ。其一は個々の具體的な貨幣價值の大きさは如何にして決定せられるや、即ち今日に於ける貨幣價值の一定の高さ、或は一年前に於ける貨幣價值の一定の高さは如何に

して決定されたるやの問題であり、其二は資本主義經濟社會内に於ける貨幣價值一般の高さは如何にして決定せられ變動するやの問題である。前者は具體的、發生的問題であり、後者は抽象的、理論的問題であつて、全く性質を異にするのである。従つて一方の解答は他方の解答たり得ない。併し乍ら論理上は後者の問題の解決を前提して初めて前者の答を與ふことが出来るのである。今吾人が茲に問題とするは個々の具體的な貨幣價值の大きさの決定根據ではなくして、貨幣價值一般の變動根據である。然るに限界利用論者は前者の解答を以て後者の問題を解き得たりとするのであつて、疑もなく見當違ひの議論をなすのである。従つてかゝる所論を以て Nihil より脱出し得たりとは言ひ得ないのである。Anonim が他の問題に關して述べた次の言葉は吾人の上述の主張を裏書きするものである。即ち彼は曰く「扱て國民經濟的價值問題は何處に存するや。そは交換關係の決定性の問題である。經驗の中には一定の大きさの交換關係が與へられて居る。交換關係の大きさは何によつて決定せらるゝや。これが國民經濟理論の問題である。併し乍ら、そは一定の具體的交換關係即ち現在に於て經驗が吾人に示すところの交換關係の一定の具體的高さは、何によつて決定せらるゝやを意味するものではなく、交換關係の高さ一般は *generell „im allgemeinen“* 何によつて決定せらるゝやを意味するのである。勿論兩者は共に設定することの出来る問題ではあるが、二つの異なる問題である。而してその一方のみが理論の問題である。」「此一般的、理論的問題の解決は當然かの具體的、歴史的の問題の解決に對する前提である。」<sup>(5)</sup>と。

茲に一步を譲り貨幣限界利用學說に於ける以上の諸欠點を無視するも尙此學說は看過するを許さぬ重大なる

欠陥を有するのである。論者は貨幣の客觀的交換價値の變動は個々の價格の變動によつてのみ生ずる、故に個々の價格の變動原因を明かならしむることによつて間接に貨幣の客觀的交換價値の變動原因を窺ふことを得ると考へるのである。されば彼等は貨幣價値論の任務と價格論の任務とは本質的に異らずと觀るのである。何となれば若し兩論の説く可き任務が本質的に異なるならば此を解く可き原則も亦本質的に異らねばならぬからである。果して此態度は是認せらるゝであらうか。此問題を決するが爲めには、價格並に貨幣價値の性質を明かにしなければならぬ。

抑々價格は、現在通用の解釋に従へば、貨幣單位を以て表示されたる、個人主義的交通過程に於て財相互が交換せらるゝところの數量的關係である。而して價格論の任務とす所は、如何なる原因又は理由によつて一財は某々の貨幣額を支配するに、他の財は之と異なる貨幣額を支配するやを説明するに在る。此際價格論は前者の財が支配する貨幣の單位と後者の財が支配する貨幣の單位とはその妥當性に於て同一なることを前提とする。故に結局價格論の任務は一財と他の財とは何が故に一定の相互の關係に於て交換せらるゝやを解明するに在る。即ち價格論の中心問題は、一財が一〇〇圓であり他の財が五〇圓なる場合、何が故に兩者の關係は $2:1$ の關係なるやである。此際 $2:1$ の關係が何故に $100:50$ となつて現はれるやは、價格論の根本問題ではない。

他面貨幣價値論の任務とするところは何れに存するや。言ふ迄もなく貨幣の市場力換言すれば客觀的交換價値を説明せんとするに在る。されば例ば限界利用論者 Philipovich は曰く「吾人は貨幣の交換價値をその購買



力と名けることが出来る。商品に對する貨幣のこの關係は生産、收入及消費過程に大なる意義を有する、故に此を以て本來の貨幣價值問題と看做することが出来る、<sup>(1)</sup>と。然るに貨幣の購買力は物價平準の逆數なるが故に貨幣價值論の任務は、換言すれば、物價平準の研究である。然らば物價平準とは何か。物價平準は此を Indexziffer を以て示すことが出来る。此 Indexziffer の構成に關しては技術上は種々の困難が存するも、理論上此概念を把握するはしかく困難ではない。吾人は理論上種々の商品の公分母を求めたりとする。それは客觀的價值學說に從つて社會的に必要な労働時間と見ても、主觀的價值學說に據つて利用單位と考へてもよい。今凡ての商品の公分母たる労働時間又は利用單位が支配するところの貨幣單位の平均數を求めらば、それは理想的 Indexziffer である。而してこの逆數即ち各貨幣單位が支配する平均労働時間若しくは利用單位が貨幣の購買力の大きさである。財のかゝる單位が支配する貨幣單位の平均數が大なる時は物價の騰貴を意味し、それが少なきときは物價の下落を意味する。故に物價平準の研究は何が故に一財と他の財とは 2:1 の割合で交換せらるゝやには存せずして、何が故に 2:1 の割合が 100:50 として表示せられ、200:100 の關係で表示されざるやを明かにするところにその任務を有するのである。

以上によつて兩現象の特質從つて兩論の任務が明かとなつた。價格論の任務は相對數の研究であり、物價論の任務は絕對數の研究である。從つて兩論の説明原理は當然異らねばならぬのである。然るに論者は此根本的差異を無視し、一方の原理を以て他方を説かんとするのである。然し構成の異なる二つの現象を同一の法則によ

つて把握せんとするは同じ構成の二現象を同一原理によつて統一し得ざると同様の誤りに陥るのである。

以上の所論を以ても尙満足し得ぬ人には茲に比喻を以てこの關係を明かにしよう。吾人は骨牌遊びに際して記號を用ひる。先づ最初に四人が等しく一五〇の持前で始め、遊戲の後にA・B・C・Dは各々三〇〇・一五〇・九〇・六〇を獲得し得たりとせよ。即ち最初A・B・C・Dの持前の關係が1:1:1:1であつたものが10:5:3:2になつたとする。此際吾人は二つの問題を提出することが出来る。一は何が故に1:1:1:1の最初の關係が10:5:3:2に變じたるやであり、二は何故に此10:5:3:2の關係が絶對數300:150:90:60によつて表はされるやである。前者は價格の問題に相當し後者は物價平準の問題に應ずるのである。前者に對する解答は各人が骨牌遊びに際し現はしたる技倆に於て見出すことが出来、後者の解答は此骨牌遊びに用ひられた記號は全部で六〇〇箇であり遊手が四人であつた、換言すれば四人が各々最初に一五〇箇持ち出したと言ふ事實に求めることが出来るのである。第一問と第二問とは問題そのものゝ性質が異なる。従つてその説明の原理も異らねばならないのである。然るに物價、貨幣價值を價格理論を以て説かんとする者は恰も遊び手が功妙なる時は初めの各々の持前は多數であり、下手なる骨牌の遊び手は少き持前を以て始めねばならぬと主張すると同様の矛盾をなすのである。故に價格理論と貨幣價值理論とは異なる法則によつて説明されなければならぬ。價格説明の學說より離れて貨幣價值學說は存在しなければならぬ。此點を無視するところに主觀的貨幣品質學說の根本的誤謬が横はるのである。

(1) Vgl. Kichiro Soda : Geld und Wert. 1924.

山崎博士「コンチー」と「コーリチー」(國家學會雜誌、大正五年九月號)

左右田博士 貨幣論上の限界効用學說(經濟哲學の諸問題、二八三—三五三頁)

坂四教授 貨幣價值と限界利用說(經濟生活の歴史的考察、三三一—三四四頁)

左右田博士 貨幣論上の限界効用學說(國民經濟雜誌、大正八年七月號)

土方博士 累進稅の根據と限界効用說(經濟學論集、大正十一年六月號)

土方博士 限界効用說の經濟學上に於ける意義(經濟學論集、大正十一年十月號)

土方博士 貨幣價值の成立と租稅の作用(經濟學論集、大正十二年二月號)

左右田博士 貨幣概念を中心として(商學研究、大正十三年三月號)

高垣博士 貨幣價值に關しての私論二題(同上)

(2) Kurt Wicksell : Geldzins und Güterpreise. 1898. S. 24.

Karl Helfferich : Das Geld. 1923. S. 577.

(3) Vgl. Hirsch. a. a. O. S. 120—131.

(4) 限界利用說と貨幣の客觀的價值(國民經濟雜誌、昭和五年十一月號一三頁)

(5) Mises. a. a. O. S. 99—100.

(6) a. a. O. S. 86—87.

(7) a. a. O. S. 100.

(8) Der Stand der reinen Theorie in der, Festgabe für Lujo Brentano zum 80. Geburtstag" II. Bd. 1925. S. 313.

## 五、結 論

以上によつて吾人は客觀的たると主觀的たるとを問はず、貨幣品質學說の成立し得ざることを明かにした積りである。抑々經濟價值は社會的實體價值と社會的職能價值との結合するところに生ずる。然るに貨幣價值は社會的職能價值それ自身である。故に貨幣價值は自からを條件とする經濟價值たることは出來ない。従つて經濟價值のために建設されたる學說を以ては之と性質を異にする貨幣價值を説明し得ざるは當然である。此不能を敢てせんとするのが貨幣品質學說の目的である。されば吾人は一般經濟價值の法則を離れて貨幣價值に固有の説明原理を建てなければならぬのである。

今日の經濟社會の根本前提は私有財産と分業制の結合である。従つて各人の慾望の對象の大部分は社會の他の成員によつて供給せられ、各人の經濟活動は社會の他の成員の爲めに行はるゝを原則とする。而してこの徵用的活動と奉仕的活動とは、個人主義的、社會的交通によつて結合せられるのである。故に國民經濟の根本過程は各經濟人が自己の所有する一定の對象若しくは作爲を個人主義的、社會的交換過程に投入し、之に對して任意の他人の所有する對象若しくは作爲を個人主義的、社會的交換を通じて獲得すると云ふことに在る。今假りに個人主義的、社會的交通の對象を、それが物財たると勤勞たると法的、社會的關係たるとを問はず、茲に社會

的生産物 *Sozialprodukte* と名付けるならば、上述の根本過程を次の如く言ひ換へることが出来る。即ち各經濟人は一定の社會的生産物を個人主義的、社會的交通過程に投入し、それによつてそこから任意の社會的生産物を引き出すことが出来ると。されば今日の交易過程に於ては絶ゆることなき社會的生産物の流入と流出とが生ずるのである。斯くて國民經濟の根本過程は社會的生産物の永遠の *Kreislauf* を構成するのである。而して此過程に一定の社會的生産物を投入したる者が如何なる割合の他の任意の社會的生産物の引き出しをなし得るやは、その時々にはける兩社會的生産物の市場妥當性 *Marktgeltung* によつて決定せられるのである。

以上は貨幣を抽象して考へたる國民經濟の根本過程であるが、現實の經濟社會に於ては社會的生産物の投入と引出とは通常直接同時に行はれずして、其間に貨幣が介在するのである。詳言すれば一定の社會的生産物を投入したるものは直接任意の社會的生産物の分配に與からずして、先づ一定額の貨幣を受領し、而して後任意の時期に之を以て自己の欲する社會的生産物を引出すのである。即ち貨幣經濟社會に於ては社會的生産物の交易過程への流入は販賣によつてその流出は購買によつて生ずるのである。されば貨幣は社會的生産物と正しく反對の *Kreislauf* をなすのである。

故に一定の期間内に於て *Kreislauf* に入りたる社會的生産物の價格の合計は、その期間内に於て同じくこの過程に入りたる貨幣量に等しいのである。従つて物價平潤は理論上貨幣全量を社會的生産物の單位數で割つた商である。貨幣の市場力、換言すれば購買力は反對に貨幣單位の數を以て社會的生産物の單位數を割つた商に

等しいのである。されば貨幣價值の高さは二つの要素、一定期間内に存在する貨幣單位の數量と同期間に存在する社會的生産物の數量とによつて決定されるのである。

併し乍ら茲に注意を要するは貨幣價值に對して意義ある貨幣數量は一國民經濟内に存在する可捕捉的數量ではなくして *Kreislauf* に入り來る貨幣即ち購買の爲めに市場に提供せらるゝ貨幣の數量であると云ふことである。今前者を實體的貨幣量と名付け後者を職能的貨幣量と名付けるならば、貨幣價值に對して意義ある貨幣量は實體的貨幣量ではなくして職能的貨幣量である。此兩者の大きさは異なる。何となれば、實體的貨幣中の或ものは一定期間内に於て繰返し購買に従事するが故に、一方に於て職能的貨幣量は實體的貨幣量よりも大である。他方に於て貨幣は社會的交換手段たる職能以外の用途例へば手許金等に充用せらるゝが故にそれだけ職能的貨幣量は實體的貨幣量よりも少となるのである。

我吾人にしてこの兩貨幣數量の概念を區別して考ふるならば、貨幣價值の高さは職能的貨幣量と社會的生産物とによつて決定せられ、社會的生産物の量にして同一なりとすれば、貨幣價值は職能的貨幣量と反比例的に變動すると言ふことが出来る。

併し乍ら、この命題から職能的貨幣量の増減は常に貨幣の購買力に關係を有するとは結論することは出来ない。この種の結論は職能的貨幣量が變動するも尙社會的生産物の數量は不變であると言ふ前提の下に於てのみ可能である。然るにかゝる前提は常に必しも實際に存在しないのである。何となれば或種の絶對的、職能的貨

幣量の増減は社會的生產物の數量の増減を伴ふからである。故に貨幣價值に意義ある貨幣量は絶對的、職能的貨幣量ではなくして、相對的、職能的貨幣量である。

要するに貨幣價值は、貨幣の相對的、職能的貨幣量が増加する時縮少し、その數量が減少する時増大するのである。かく言ふ時は吾人の解釋は所謂貨幣數量説<sup>(2)</sup>と何等擇ぶところなきが如きに見へるのであるが、事實に於ては大いに異なるのである。吾人は上述の命題に於て時なる語を用ひたのであるが、それは甚だ瞬昧なる語であつて茲に大なる問題が潜むのである。而して此問題の解答に際して吾人は數量説から別れるのである。從來の論者によれば、この時なる語は單なる *Parallelverhältnis* を意味する許りでなく、その背後に一方的因果關係を認めるのである。數量説は貨幣量を原因、物價平潤（購買力）を結果と解するに對し *Banking School* は後者を原因、前者を結果なりと主張し、兩學説は貨幣論上の一大論争として幾度となく繰返され今日尙終局的解決を見ないのである。然らばその何れが正しいであらうか。

吾人の考を以てすれば何れも正しくはないのである。勿論吾人と雖も彼等と共に兩要素の間に *Parallelverhältnis* あるを認める。併し乍ら兩者の間に彼等が主張するが如く一方的因果關係あるが故に *Parallelverhältnis* を認めるのではなくして、兩者は同一事實の二つの異なる現象形態なりと信するが故である。既に述べたるが如く、貨幣の購買力即ち物價平潤に對して意義ある貨幣量は相對的、職能的貨幣量である。かゝる貨幣量の變動は貨幣の購買力、物價平潤の變動を前提せずしては考ふことが出来ない。反對に貨幣の購買力、物價平潤

の變動を貨幣量の變動から離して考ふことは論理上不可能である。かゝる事情の下にある貨幣量と貨幣購買力とに對し何れが原因なりや結果なりやを問ふは、恰も預金銀行あるが故に預金者あるや、預金者あるが故に預金銀行ありや何れが原因又は結果なりやを爭ふが如き無意義なる質問である。そは問題の設定それ自身が誤るのである。問題として設定し得るは單に預金制度は現社會に於て何が故に存在するや、その盛衰は如何なる他の事情に左右せらるゝや等であつて、此問題の解決は自ら預金銀行並に預金者數の繁榮大小の問題を答ふるのである。此と同様前述の意味に於ける貨幣數量と貨幣の購買力との因果問題は設定の仕方それ自身が誤つて居るのである。吾人が茲に提出し得る問題は抑々相對的、職能的貨幣量の増減は如何にして生ずるやと云ふことである。この問題の解決は同時に貨幣購買力變動原因の説明となるのである。故に貨幣價值變動の問題は結局貨幣創造の問題 *Geldschöpfungsproblem* に歸するのである。

(一九三一、七、卅)

(1) 此概念の詳細なる規定は拙著 *Sozialökonomische Theorie des Geldes*. 一〇六頁以下參照されたい。

(2) 鬼頭仁三郎氏は國民經濟雜誌(第五十卷第三號)に於て拙著に對し誠に懇切なる批評文「大野教授の近業、社會經濟的貨幣論を讀む」を惠まれ意味深き暗示を賜つたのである。然るに歸國後雜務に忙殺せられ、熟讀して尙余の理解力に及ばざる深き暗示あるに不拘、今日まで教を乞ふの機を得ざるを遺憾とするのである。何れ機を見て再び教を乞ふ積りであるが、偶々同文中貨幣數量説に關する余の概念を叱正せらるゝところあるが故に茲に一言附記したい。

貨幣數量説の定義は非常に多く存在するのであるが、余は此概念の下に貨幣の數量と貨幣の購買力との間に直接比例的因果の關係を認め、前者を以て原因、後者を以て結果なりと主張する學説を總稱せんとする。



斯くの如く余は貨幣量と物價平瀾間の因果關係を以て數量說の一つの特徴と見るに對して鬼頭氏は「されど今日の如く謂ゆる數量說が雜多なる構造と内容とを包含する場合に、此の如くこの二つを一方的因果關係の下に置くか否かによつて數量說と然らざる說とを簡單に區別し去ることは一般の觀念と甚しく矛盾する。」と批難せられ、結局拙著に於ける余の說も亦數量說に屬すると言はれるのである。

拙著に於て展開した卑見が數量說なる名稱の下に包括さる可きや否やは數量說に如何なる定義を與ふるやによつて決せられる。故に數量說を廣義に解す可き正當の理由あらば余の說を數量說なりと主張せらるも何等差支なののである。それは單なる言葉の問題である。然し乍ら數量說の定義を廣く採り、鬼頭氏の言はるる如く、兩要素間に因果以外の關係を認める學說をもこの下に屬せしめる時は殆んど凡ての貨幣價值學說は貨幣數量說なりと云ふ矛盾に陷る。何となれば古來何等かの意味に於て貨幣量の増減と貨幣の購買力との關係を認めざる學說は一つもなかつたと斷言して憚らないからである。斯くては事物の特異性を表はすと云ふ名稱の本質に反するのである。かゝる理由から余は數量說を前述の如く定義するのである。従つて卑見は數量說にあらずとする。

